

富士に祈る 68

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



御霊地を訪れた米内海軍大将(前列中央)(解脱会提供)

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その22 —

先回は昭和十七年（一九四二）、戦局がいよいよ厳しさを増す中で、二回目の三聖地巡拝を行ったところまでを記した。今回は、聖憲が昭和十七年五月に教義のエッセンスともいえる、「真行」を刊行したことや、その直後に大病を患ったこと。そして、病から奇跡的に復調し、御霊地に米内海軍大将を迎えたところまでを記す。

昭和十七年五月、三聖地巡拝を無事に済ませ、春の大祭が執り行われるのにあわせて、聖憲は解脱会にとつて非常に重要な小冊子である、「真行」を刊行した。当該書は「神人世活の意義」、「真行実践」、「神霊の認識」、「滅の生命」、「神を尋ねて」、「神人合一」、「父祖の霊」、「世界一元」と題する八つの文章から成る解脱会の教義のエッセンスをまとめたものである。この

中で聖憲が、「神人世活（神と人との交流生活）」を行うために必要な事として第一に主張するのは、「神霊の実在を認識すること」である。これは、抽象的な概念ではなく、「真実魂を以て触感し得る神霊」であり、これに接してはじめて神と人との交流ができる。聖憲は説く。また、「人は神によって生かされている」のであって、「瞬時も神と離れることの出来ない本則がある」のだという。そして、この神と人を結ぶ最も直接的な媒体が、「祖先の霊」であるとするのだ。こうした一連の教えは、聖憲がこれまで体験してきた様々な事柄に基づいており、いわば教えの凝縮でもある。さらに、こうした時期に「真行」を発刊したことは、聖憲が「日本国民が真に魂の覚醒を得るべき時」が到来しつつあると実感

していたからに他ならない。時代を「修行道場」として「魂の覚醒」を得て自分たちの生かされている世界と、自分自身の真実の姿を見据えていくことが、厳しい時代を乗り越えていく力になると聖憲は考えたのである。事実、大東亜戦争の戦況は厳しさを増していた。六月のミッドウエー海戦における敗北、八月からはガダルカナル島での日米の攻防が激しさを増し、十二月には同島からの撤退が決まった。昭和十八年（一九四三）に入り、四月に連合艦隊司令長官・山本五十六がブーゲンビル島上空において戦死し、日本国内に大きな衝撃が走った。さらに、五月にはアッツ島玉砕と、日本軍は徐々に守勢に転じていったのである。こうした戦況にあわせて一月には「繊維等配給統制規則」が商工省から出され、繊維の配給が一層厳しさを増した。また、四月には厚生省が出生増加と結婚

奨励、母子健康の徹底を主眼とした「健民運動実施要項」を各地方に通牒した。いわゆる「産めよ増やせよ運動」の始まりである。

混迷を極める社会情勢の中で、聖憲の産業指導は続いた。この時期、食料不足を補うために長野県諏訪湖へ幼鯉五十万匹を放流し、衣料の増産のためにこれまでの家蚕に加え、野生種で「ヒマ」の葉を食べて育つヒマ蚕（「天蚕」とも）の飼育などを始めたりしている。しかし、そうした息をつく間もないほどの活動が次第に聖憲の肉体を蝕んでいた。二月二十五日昏倒した聖憲の眼は突然光を失い、三月には入院する事態となった。持病となっていた糖尿病が進行し、慢性腎臓炎を併発していたのである。通常ならば回復もおぼつかない状態であったが、奇跡的な回復をみせた聖憲は二か月弱の入院生活を経て三回目の三聖地巡拝が行

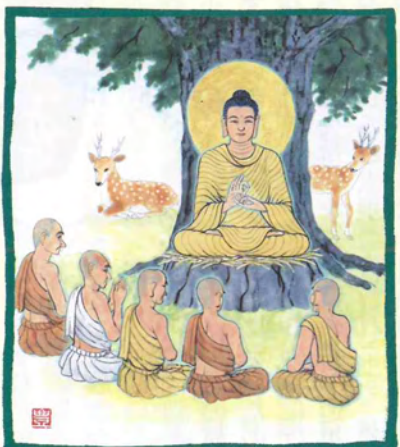
われる四月上旬には退院したのである。こうした聖憲の精神的強靱さに驚嘆した医師は、「病めども病まず」と感じ入ったという。

そして、同年五月一日北本宿の御霊地では米内光政海軍大将を迎えていた。米内と聖憲のつながりは昭和十六年に聖憲の還暦を祈念して御霊地に建立された「頌徳碑」の揮毫を依頼したことによる。それから一年半ほどの間に社会的状況が様々に変化したことは先にも記したが、米内はこの度大宮氷川神社、埼玉県護国神社に参拝した後、御霊地を訪れることを聖憲に知らせてきたのである。米内の訪問に対して聖憲は車から昼食、土産の手配まで万端の準備を整えた。そして、当日は聖憲が手配した車に乗って、米内は大宮氷川神社、埼玉県護国神社を参拝した後、御霊地へと到着したのである。御霊地の案内と接待は聖憲の兄・新三



郎とその子・義昌、そして解脱会の顧問である小林信吉が受け持った。参道を進んだ米内は「天神地祇一神宮」に参拝し、続いて「萬靈魂祭塔」の前で黙礼をして自ら揮毫した「頌徳碑」の前でしばし佇んだ。そして、休憩をはさみ、記念撮影を行った後、感謝会館で昼食をとり、引き続き「大日本精神碑」に黙礼した。米内はしばらく当該の碑を見つめていたというが、心中に去来するものが何であったか知る術はなかった。米内は引き続き海軍の先覚者である小栗上野介の墓所である大宮・普門院へと向かい御霊地を離れていた。

釋尊の歩みは 33 句・菅谷秀文



絵・橋本豊治

② 五人の比丘等にまず初転法輪

初転法輪とは、初めて説法したことを言う。説法を決意した釈尊は始めに、修行をしていた頃に仕えた二人の師に伝えようとしたが、二人とも亡くなっていた。次に苦行を共にした五人を仲間にしようと旅に出る。

五人の修行者は、釈尊は苦行の落伍者であるとして、決して受け入れまいと決めていました。が、悟りを開かれた威厳に圧倒されて、説法に耳を傾けたという。輪とは武器の一種で、それを転じることで世界を征服できると考えられていた。釈尊は法と征服するので、説法を転法輪という。